

第2章 昭和63年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設に係る立会調査

調査地区 吉田構内 I-16

調査期間 昭和63年4月15日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1㎡

調査結果 工事は教養部複合棟の新営に伴い、新営予定地に存在した自転車置場を解体撤去し、複合棟の北西部分に移設するものである。工事による掘削規模は原則として現地表下約50cmまでである。この地域は、過去の調査結果から現地表から約100cm下位までは構内造成時の置き土であることが明らかとなっていることから、¹⁾深掘りを伴う自転車置場の支柱基礎部分2ヶ所について立会調査を行なった。

その結果、2地点とも現地表下約100cmまで腐植土および構内造成時の埋め土であったが、その下位には黒褐色砂質土の堆積が認められた。調査時の出土遺物はなかったが、同層には木炭が含まれており、遺物を包含している可能性は高いと考えられる。堆積厚は確認していないが、過去に今回の調査地点のすぐ南側で現地表下約120cmで弥生土器を含む厚さ約20cmの黄灰色粘質土が検出されており、²⁾同地域では現地表下約100cm以下に少なくとも2枚の遺物包含層が堆積しているものと考えられる。

(河村)

[注]

- 1)、2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教養部環境整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。

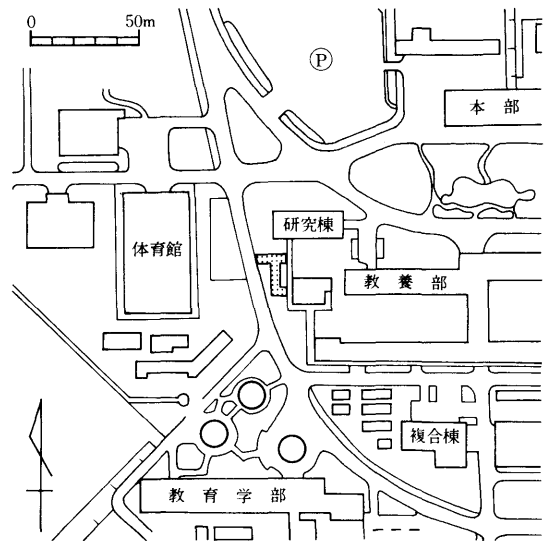


Fig. 4 調査区位置図

2 国際交流会館新営に伴う排水管理設に係る立会調査

調査地区 吉田構内 O-22

調査期間 昭和63年4月27日、28日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約35㎡

調査結果 独身宿舎南東部に当たる埋設管路東端部では、現地表下約60cmで、落ち込みの緩やかな河川跡ないしは溝を検出した。検出面での幅は80cm、南北方向に流路をもつものと考えられる。検出面からの深さ40cmを計る。出土遺物はなく、時期は不明である。

中央部のやや西で、現地表下48~50cmにかけて、弥生土器片を含む茶褐色粘質土の遺物包含層を検出した。以下、現地表下60cmまでの間には淡灰褐色粘質土が堆積している。出土遺物はなかったが、包含層の可能性をもつ土層である。現地表下60cm下位は黄褐色粘質土の地山となる。これより西の地点では、現地表下64~75cmにかけて灰黄褐色土の遺物包含層が堆積しており、弥生土器、須恵器片が出土した。その直下には、灰黄色土が見られ、現地表下85cm以下に淡黄褐色粘質土の地山を確認した。このように堆積状況は、一様ではないが、埋設管路での基本層序は、埋め土、旧耕土、床土、遺物包含層、地山となる。

地山は西に向かうにつれ、より下位で検出され、東あるいは南から延びる丘陵は、独身宿舎西部付近では、あまり削平を受けていないものと考えられる。しかし、西端部の土層

に見られるように埋め土の直下に地山が見られることから、大学造成時におけるある程度の削平は考えられる。現在独身宿舎西部と、国際交流会館との間に約1.5m程度の段差がついているが、これは地山の削平によって作り出されたものではなく、基本的には、盛り土によって、見かけ上の段差が生じているものと考えられる。

出土遺物は数点の弥生土器と須恵器であるが、いずれも細片のため図化できない。

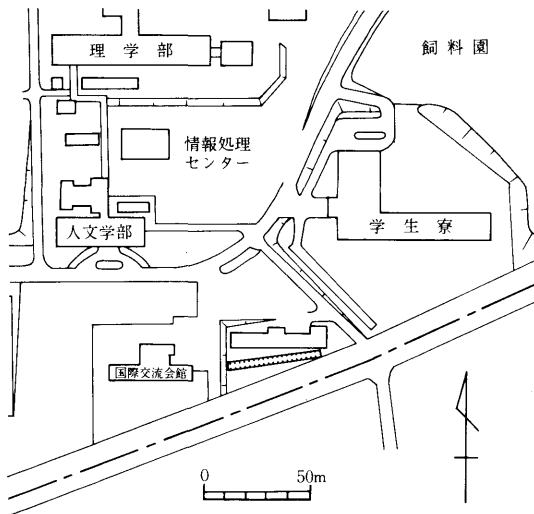


Fig. 5 調査区位置図

(木村)

3 教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設に係る立会調査

調査地区 吉田構内 J-18

調査期間 昭和63年5月10日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1㎡

調査結果 工事は複合棟への電気ケーブルの引き込みに伴い、現地表から約50cm掘削するもので、工事面積も小規模であった。しかし、工事地点のすぐ北側に位置する複合棟敷地での発掘調査¹⁾で、現地表下約40~50cmで弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡、河川跡および江戸時代の建物跡、井戸が検出されていること、また、これらの遺構検出面が縄文時代晩期中頃の遺物包含層となっていることが明らかとなったため、立会調査を実施した。

その結果、工事による掘削範囲内は構内造成時の埋め土であった。なお、工事区域内南端部で深掘りを行ない、現地表下約80cmで弥生時代以降の遺構面であるオリブ灰色粘質土 (Hue10Y5/2) を検出したが、遺構は確認できなかった。さらに約20cm掘り下げたが、縄文時代に遡る遺物は出土しなかった。

複合棟敷地と今回の調査地点の現地表面の高低差はほとんどなく、立会調査の結果、標高約18.10mで遺構面が検出されている。また、複合棟と教育学部附属教育実践研究指導センター²⁾両敷地での弥生時代以降の遺構面は標高約18.40~18.50mで検出されることから、両敷地間は小規模な谷状の落ち込みに立地しているものと推察される。複合棟新営に伴う試掘調査で設定したEトレンチで検出された河川跡は、この谷状の落ち込みを東西方向に流れるもので、当該地域周辺の立地および遺構の分布状況が次第に明らかになりつつある。(河村)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教養部複合棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年)。

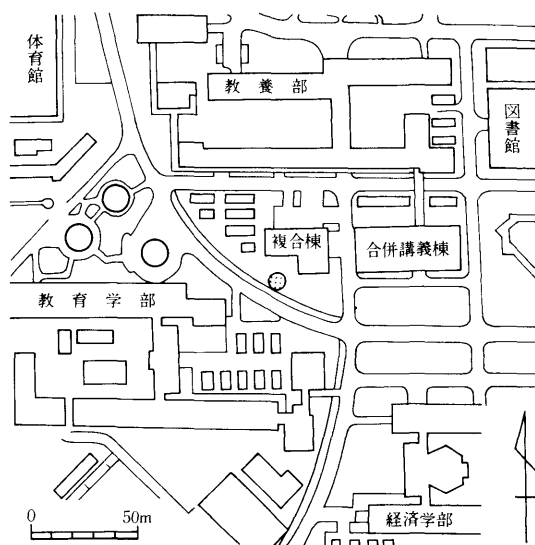


Fig. 6 調査区位置図

4 サッカー・ラグビー場改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 F-19、G-19、H-19・20

調査期間 昭和63年11月18日、平成元年1月27日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約25㎡

調査結果 工事内容は、サッカー・ラグビー場の改修である。グラウンド面における表土のみの掘削については、埋蔵文化財に対する影響はないものと判断されたが、器具庫東側とラグビー場の南・北・東の3コーナーに新設される側溝部については、前もって埋蔵文化財の有無を確認する必要性があった。掘削深度は、器具庫まわりで現地表下15cm、ラグビー場まわりで現地表下17～19cmである。周辺の土層堆積状況は、遺跡保存地区に隣接しており、当地がグラウンドとして、その造成に対して大きく削平を受けていると考えられるものの、遺物包含層・遺構の存在が予想された。

11月18日、器具庫まわりで3ヶ所、ラグビー場まわりでは、東西2ヶ所において試掘坑をあけた。

その結果、器具庫東側では、現在の地表面から約15cm下位で、遺物包含層あるいは遺構埋土と考えられる黒褐色土が見られた。一方、ラグビー場東側では、現在の地表面から約31～45cmの掘削を行ったが、いずれも埋め土の範囲内であった。

この時点で、器具庫東側の側溝部についてのみ、事前調査を実施する必要性が生じたが、関連部局との協議の結果、最終的に、掘削深度を13cmにする工法変更の措置がとられ、工事施工時における立会調査を実施することとなった。

1月27日には、その立会調査を実施したが、顕著な所見は得られなかった。なお、弥生土器の細片を数点、排土中から表採できたが、図化は出来得ない。

(木村)

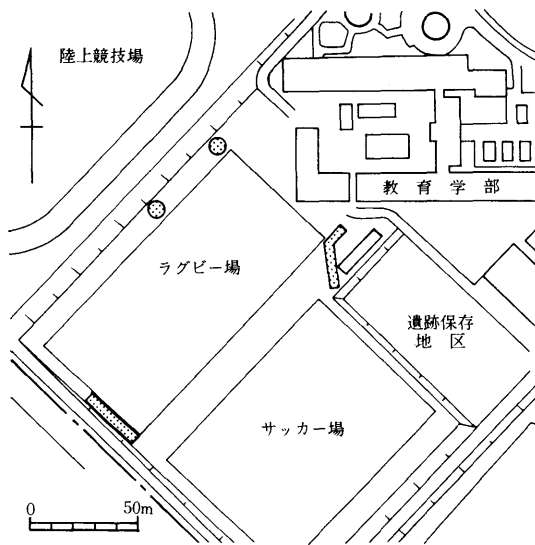


Fig. 7 調査区位置図

5 消防用水設置に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 K・L・M-22

調査期間 平成元年3月29日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約7.5㎡

調査結果 工事内容は、防火貯水槽の新営および同施設と連結・分岐する配水管の布設である。

配管部分については、東より（防火貯水槽付近）の土層堆積状況は、現地表面から70cmまでが、埋め土であり、以下、現地表下80cmまでが旧耕土、以下、地山と続く。地山は現地表下80～110cmの黄褐色粘土（Hue2.5Y5/6）とそれ以下の堆積層とに分層できる。現地表下90～100cmのレベルにかけては、多量の木炭を含んでいた。顕著な出土遺物はなかったが、同層は色調、組成から、¹⁾ 教養部複合棟敷地で検出された縄文時代に遡る包含層の可能性が高い。

また、防火貯水槽に隣接する最東端では、砂礫層の地山が現地表下60cmで確認された。

ハンドボールコートの北端にあたる管路西側の土層の堆積状況は、現地表面から25cmまでが腐植土で、以下、層厚15cmの構内造成時の埋め土の直下に弥生時代以降の遺構面を構成する層厚20cmの暗灰黄色粘質土（Hue2.5Y4/2）、層厚5cmのオリーブ黒色粘質土（Hue5Y3/1）、1cm未満の礫を含む砂礫層と続いている。なお、暗灰黄色粘質土は多量の木炭を含んでいた。

いずれの地点においても、遺構・遺物の発見はなかった。

（木村）

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教養部複合棟新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年）。

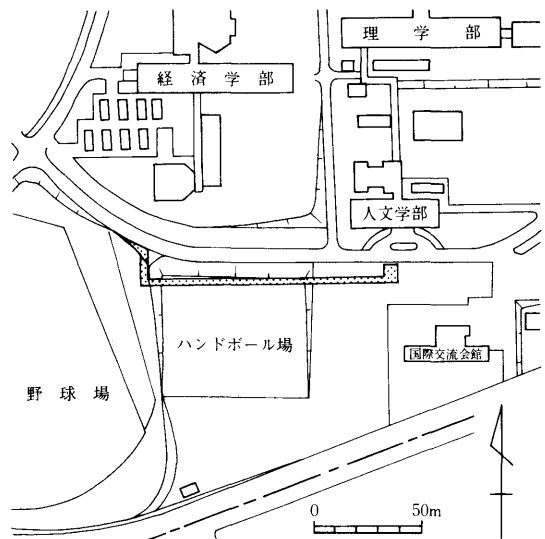


Fig. 8 調査区位置図